

中国における一人っ子女性の 出産意識に関する研究： 出産を巡る親子間の葛藤に注目して

ZHANG Rong

本論文の目的は、政策、人口、経済などの社会変化の中で、中国の都市部における家族規範の実態、あるいは出生や育児に関する人々の考え方の一部をインタビュー調査を通じて明らかにすることである。

中国では、1978 年から市場経済の導入を伴う改革開放政策が開始された。当時、人口の増加が続き、経済が遅れているところが多く、一人当たりの資源が相当に不足していた。そのため、1979 年から「一人っ子政策」という計画出産政策が実施された。この政策により、子どもの数が急速に減少し、人口の爆発的な増加が抑制された。

一方、「一人っ子政策」の効果は認められるが、同時に副作用も現れた。人口抑制政策の実施と並行して、出生率の低下に伴う様々な問題が深刻化している。具体的には、労働人口の減少、高齢者の増加、出生性比の不均衡の拡大による結婚難問題などの社会的問題が浮上した。このような問題を解決するため、2015 年末、中国政府は、「一人っ子政策」を撤廃した。「二人っ子政策」というすべての夫婦に二人目の子どもを持つことを推奨する政策になったのである。しかし、中国の出生数は「二人っ子政策」が始まった 2016 年には大幅に増えたが、早くも政策効果が消えつつある。

人口の動向は、制度や社会環境の変化が激しい時代において、家族規範、すなわち家族やそれに関する考え方や態度についても、考えておく必要があるだろう。現在、「一人っ子政策」が始まってからの一人っ子世代は、すでに出産年齢に達し、親として育児を担う時期に入っている。彼らの親世代(祖父母世代)は、自分たち自身は多子(多きょうだい)の環境で育ち、多子選好という価値観を身に着けている可能性が高いのにもかかわらず、一人っ子政策という強制的な人口抑制措置のため、第二子を産む可能性は多くの場合閉ざされていた。この祖父母世代は、い

ってみれば自分たちの家族規範を実現することが難しかった世代である。2015年の「二人っ子政策」の導入による出生数規制の緩和は、祖父母世代が、自分たちにはできなかった家族規範の実現を、自分たちの子どもならばある程度可能にできる変化をもたらした。

ただ、祖父母世代が自分たちの理想を彼らの子ども世代(一人っ子世代)に実際に求めているのかどうかは、必ずしも明らかではない。祖父母世代と一人っ子世代とのあいだの家族規範の対立についても、まだわからないことが多い。

そのため、本研究では、出生や育児に関する家族規範について、親世代が「二人っ子政策」が導入された自分の子ども世代の出産に対してどのような考え方を持っているか、また育児環境の違いなどの側面において、どんな価値観、あるいは考え方についての世代間の差があるかを明らかにしていく。

第一章では、中国の人口問題の現状と出生政策の推移について概説する。まず、中国の人口問題について論じる。中国の人口抑制政策は、出生率の低下をもたらしたが、労働力の不足、高齢者の増加、出生性比の不均衡などの問題も浮上した。このような社会的問題を解決するため、中国政府は出生政策を転換した。この出生力抑制政策のもと、急激な人口変化の中で形成された「一人っ子世代」が持つ家庭意識について検討するのが本論文の目的である。

第二章では、中国の家族規範について、日本との比較を加えつつ、先行研究を参照しながら説明する。日本と中国は、儒教文化圏という共通点があり、いずれにおいても家父長制的な家制度が強かったが、一定の差はある。この章では、特に中国における性別選好、姓継承などの出生に関連する家族規範、または育児形態に関する研究について具体的に説明を行う。

第三章では、人口変化の社会的な影響についての代表的な見方を論じる。欧米諸国の歴史的経験に基づいての人口転換理論を論じ、東アジアの近代の特徴を捉える「圧縮された近代」という概念を説明する。東アジア社会における急激な人口の変化は家族規範に影響を与えるが、社会変動の結果として出生力転換が生じた他の社会と比べると、中国の人口転換は政策によってもたらされた面が大きいという違いもある。

第四章では、インタビュー調査を通じて、一人っ子政策の下で育った女性の出産・育児に対する価値観や、彼女たちの親世代とどのような葛藤が現れるのかなどを明らかにする。現代中国の都市在住の家族における出生や育児やそれについての家族規範は、単純に残存しているのでも、また弱くなっているのでもない。出生政策、仕事の負担、伝統的意識、男女平等の価値観、世代間の意識の差など、さまざまな要因のなかで絡み合いつつ、複雑な現れ方をしている。その様子を描いていく。

最後に、第五章では、インタビュー調査による要点の振り返りと今後の課題を論じる。今回のインタビュー調査では、祖父母世代に対して直接話を聞くことができず、調査対象者の語りのなか

2019 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

で捉えたものなので、本音に近い考えを捉えることができなかった。他にも様々な課題があるが、今後の研究につなげたい。